

赤堀 このみ  
AKAHORI Konomi



closet: moments that bring back memories

アクリルガッシュ、紙、木材



closet: moments that bring back memories

今、私たちが見ている景色は、ある日突然なくなってしまう。  
それを思い知らされたのは、3年前のあの日、船から始まった出来事だった。

人がいなくなり、町は光を亡くし灰色になり、私が20年以上見てきた「当たり前」はほんの一瞬でなくなっていった。

人のために作られた、人がいなければ意味をなさない景色。  
母と行った喫茶店も、はじめての美術館も、大好きだった銭湯も、水に入れたわたがしのように消えていた。

1つずつ景色がなくなるたび、ふと眠る前に思い出すことが増えた。

夕方の柔らかい色に包まれた店内、日が落ちて青々と染まった町、蛍光灯の光で照らされた冷たい館内。その時の空気や印象的な色が頭に浮かぶ。

人は景色を思い浮かべたときに、瞬間、角度、感情でその空間を認識し、記憶としてとどめる。

例えば、私は小学校の教室を思い出すとき、人がたくさんいて柔らかい光に包まれた教室ではなく、だれもいない、薄暗い電気がついている放課後の教室を思い浮かべる。特別感があるからだ。世界にたった一人、私だけがそこに存在していることがうれしくて、記憶に強く残っているからだ。

記憶とは、同じものを思い浮かべたとしても、人によって印象は大きく異なるものだ。

だからこそ実物よりも記憶の方がもっと素晴らしかったと思えることがしばしばある。つまり人の記憶とは不確かで、それでいて美しいものを美しいままに記憶できる都合のいいおもちゃ箱のようなものだ。

私は3年前からずっと、なつかしさにとらわれている。

古ぼけた公民館で上映された映画、永遠だと感じた親友との電車内での会話、一人で入った閉店間際の居酒屋、忘れ物を取りに行った午後5時の教室の薄暗さ、冬のシンとした街並み、目を閉じるとよみがえる、やわらかく、少し冷たくて、不安なほど懐かしい記憶は、誰も予想できない事柄によりあっけなくなってしまう。だからこそ、作品にし閉じ込めることで空気、時間、感情を記録することで永遠に記録をすることが必要だ。

町はいつかなくなり、人の命には限りがある。人が必要として作り出したこれらが完全な無にならないために作品にすることで、私や誰かの記憶となり、消えないように、永遠にしたい。

悲しくて、嬉しくて、様々な感情が沸き起こる愛おしい記憶を、クローゼットに押し込めて、二度となくすことのない永遠を、すべての人に。